
VRB

弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRB

【Nコード】

N3331T

【作者名】

弥生

【あらすじ】

生物コンピュータVA。ヘガ・アルタイル

それを用いたVRMMORPG・VRB。
VRBをハジマリとする物語です。

依頼

立て続けに銃弾を撃ち込む。

ちらりと後方を確認してパーティーの香苗の作戦を聞く。

瞬きの回数とハンドシグナルで実行までの時間と内容を伝えられるのだ。

俺は敵のほうに向き直り後ろ手にシグナルを送る。

内容は勿論、了解、だけだ。

「行くよ！」

香苗の声とともに銃弾を撃ち込む。

敵の弱点を正確に射抜き、尚且つ秒間の連射数によって敵はスタン状態になる。

これは俺が見つけたもので、双銃の俺独特の撃ち方だと言われた。スタン時間は1秒半。

その間に香苗はパチン！と指を鳴らして魔法陣を構成し放つ。

ドーンと音がして、敵はポリゴンの欠片になって消える。

「大丈夫？」

「勿論。」

俺は振り返ってそういう。

ミナミカナエ
南 香苗。

17で天才ハッカーと呼ばれていた少女だ。

それに比べて俺は化け物と呼ばれていた18歳だ。

まあ、どちらも元そう呼ばれていた・・・だが。

それはもう過去の話だ。

大事なことはただ一つ。

この世界に来て一年。

まだ戦争は終らない・・・。

世界は無数に存在する。

昔流行った漫画にあった一文、

「世界はそれを知る人には一つじゃない。」

うる覚えだがそんな感じだっただろう。

俺は幼い頃にもうその存在を知っていた。

トレンシマ
アスカ飛鳥 飛鳥、それが俺の名前。

両親はそういう研究をしていたらしい。

2025年。

突如現れたコンピューター、ファースト初世代。

前時代にあった小説のものを実際に作り上げたものだったらしい。

首に嵌めるタイプのコンピューター。

機能もその小説のものと同じだったらしい。

そして2105年。

サード第三世代として開発されたのが今、俺たちの中にあるVAだ。ベガ・アルティル

脳内に埋め込まれたマイクロチップが自己成長をし、その結果脳を
コア核とした量子コンピューターとなる。

なぜベガ・アルティルなんて名前かというと、ネットワークを支えている量子コンピューターの名前が冬の大六角形の星々な名前だからだそうだ。

俺たちがこの世界に来たのもこのVAというののせい。

もっと言うとこのVAでやっていたVRBと言うMMORPGのせいだ。

俺の目的は、俺が7歳の時に失踪した親父を探すこと。

高校生になった俺は手がかりを探すため親父のPCの中を漁っていたのだが、その中で見つけたのがVRBだった。

VRB、正式名称『Virtual Reappearance
for Battle』。

この意味を正確に理解できなかった俺の落ち度つてもあるだろう。

だがこれが危険な物だって分かると思うか？

このソフトはフリーで公開されていて、俺の周りじゃ大半がやって
いたゲームなわけだ。

しかも親父が開発したとき分かったのだから、もしかしたら
とおもってやっていたわけだ。

妹の明日香と一緒に、色々なダンジョンに潜り込んでやっていたと
きは良かったのだ。

香苗と出会って一緒にやり始めたあたりの良かった。

なのに・・・どうしてこうなった？

いきなり親父を名乗る人物からこのソフトの本当の意味と謎のソフ
トを送りつけられ、それを起動したらなんか人が来てこの世界に連
れて来られた。

戦争のために創られた『戦闘用仮想再現ソフト』それがVRBだと
いう。

その機能を解放した場合、戦争に参加しなければならぬらしい。
その代わりその途中で親父に会えるかも知れないといわれ、俺はそ
の機能を解放した。

なぜか、香苗も明日香もだ。

で、それから一年、俺は此処『企業国家・皐月』で戦争に参加して
いる。

絶対あんたたちは驚く。

だってこの戦争は、一企業の跡取り争いだからだ。

この国で一番権力を持つ企業・二ノ城グループ。

当主は暗殺され、娘二人が跡取り争いをしているのだ。

「本当にくだらないですね。」

「本当にそのとおりだと思う。思うのだがなあ・・・」

今、俺たちを泊めてくれている私立軍ギルドの一つ、Cradleの一室
で6人ほどでお茶会をしている。

面子は俺、香苗、明日香、リーダー、リーダーの妹、何でも屋の男、
その男の未来のお嫁さんとか言っている少女、そしてお嬢様と従者
って、全然六人じゃなかった。

まあどうでもいいけど。

その中で俺は呆れ返っている。

「思うのだが、あんたがそれを言っていてどうする。」

俺はお嬢様に向かつて言う。

何を隠そうこのお嬢様こそ件の娘・二ノ城^{ニノジョウ} 姫^{ヒメ}。
下の娘だ。

「いいんじゃないですか？ 私は別に自分からしたくて戦争を起こしたわけじゃないのです。」

「止めとけ、姫。それは一緒に戦ってくれているこいつらに失礼だ。」

「^{ヒメカワ マサキ}そう言ったのは従者・姫川真拆。

執事のくせにタメで話す人間だ。

何か、それでいいらしい。

前当主も公認の仲だったとか。

「まあそうですね。でもこの戦争を仕組んだのはお父さんですし、お姉ちゃん^のほうには取られたくないものが沢山ありますから。」

静かに紅茶を飲む姫はとても中学生には見えない。

やはり本物は本物ということか。

「それで？ 次の仕事は？」

俺が切り出すより早く、リーダー^{キョウカ}・鉄嘩^{テツカ}が言う。

「今回は、面倒ですよ？」

カップを持ち上げて裏側を覗いてみたりと若干遊びながら答える姫。

「へえ……姫ちゃんが面倒^{ヤヨイ}つて言うってことは相当なんだね。」

そういったのはリーダーの妹の弥生。

何でも弥生と姫は同じ中学校のクラスメイトらしい。

「いや、俺たちまで呼ばれちゃってるしなあ、亜弥？」

「そうだね、お兄ちゃん。」

何でも屋の男、夕霧直夜^{ユウギリ ナオヤ}と自称その男の未来のお嫁さん、宇奈月亜弥^{ウナツキ ア}。

ついでの亜弥も中学生、姫たちとクラスメイトである。

未来のお嫁さんって・・・どうしてこうなったのか・・・。

「今回の依頼は一冊の本です。」

「・・・本？」

「はい。名を悪魔の書と言います。」

「居縄、検索。」

「はい。」

いつの間にか直夜の後ろに立っていた女の人が答える。

確かあの人は直夜の店の地下の図書館で司書をやってる居縄イナウ ムゲン夢幻さ
んだ。

居縄さんは何処からともなく一冊の本を出す。

きっとそういう能力なのだろう。

「こちらです」

「絶対に読まないでくださいね？これ以上面倒は御免です。」

「・・・禁書か。ありがとう、居縄。」

「いえ。」

そして一瞬目を離れた隙に消えた。

いや、気配を消しただけか。

それにしても禁書か・・・。

「しかし、禁書ってことは厳重管理されてるんだろ？」

「はい。しかし今回、盗まれてその上売られてしまいました。」

いや、そっちの事件のほうじゃなくて、何で居縄さんが持ってたのかって事だよ。

「居縄は本の管理もできるS級ライセンス持ちの司書なんだ。それにあれは複製だ。」

まあ危険だけど、複製でもと付け加える直夜。
さようですか。

「で、悪魔の書って何なんなんだ？」

「魔導書・・・ってそこかなあ。」

そういったのは香苗だった。

「知ってるのか？」

「まあね。何でも悪魔召喚の為の本だとか。」

確かに怖いなあ、悪魔とか。

「で、悪用されると？」

「いえ、多分ないでしょう。」

「ほう？その根拠は？」

「それを買った人間は唯のランクIです。」

ランクIとはIncompetentのIで無能力者を指す。

「魔術師でもなく能力者でもない。ましてや人外でもない……か。」

「

「でも何故か召喚に成功しちゃってるらしいんですよえ……」

姫は指でカップの淵をなぞりながらいう。

「特異点？」

「そのようです。」

魔導書一冊につき一人は居ると言われる特異点。

読めさえすれば開くだけで魔導書を発動できると言う人のことだ。

「悪魔の書の特異点ねえ。で、どうすればいいの？」

「その人をこちらの陣営に引き込んでください。」

「勿論向こうも狙ってるよね？」

弥生の言うことはそのとおりだと思う。

「ええ、まあ。でもお願いします。盗まれた本は大体こちらの陣営

のものなので。向こうには渡したくない。」

「でもなんで俺たちに？無限幸福とかに頼めばいいだろ？」

「いえ、彼はあなたたちの旧友です。えつと確か……」

「吹雪。^{ツクモ}九十九吹雪だ。」

姫川が横から言う。

つかこいつほとんど喋らないよな……。

「九十九……ああ、あいつか。納得だ。」

「納得？」

「あいつ、ランクIのくせにありえない気の流れをしていたからなあ……。」

でもまさか悪魔の書とは、と呟く鉄嘩。

「だが理解した。行ってこよう。」

鉄嘩と直夜が立ち上がる。

「俺もか？」

「いい実習になるかも知れんしな。」

「分かった。」

「あとは・・・鏡水か。」

咲良鏡水^{サクラ カガミ}、最近来てたっけ？

夜中に会った覚えしかない。

鉄嘩は電話をかけてすぐに出るぞと言った。

「香苗は？」

「私は今日食事番だから。」

「明日香は？」

「私は行く。」

「そうか」

かなり大所帯になりそうだ・・・。

依頼（後書き）

がんばってみましたがどうも上手くかけない弥生です。
次こそはもっと面白く書けたらいいなと想います。

悪魔

ー やつと手に入れた・・・。

魔導書・悪魔の書

全世界、勿論平行世界全てでも含めて禁書扱いの本なのだ。

しかし、タイトルだけで探していたため何のための魔導書か俺は知らない。

あくまで俺は本を蒐集することに意味があるのだから。

「悪魔でも呼べるのかな・・・？」

俺には魔術の心得なんかない。

能力者でもない、ランクIの一般人だ。

だからこそ読んでも大丈夫だろうと思ったただけで開ける。

中身は・・・ラテン語？

Quibus temporibus libris scriptum quod non occupant diaboli.

（この魔導書には悪魔が取り憑いている。）

とり憑いている？

表紙を開けてすぐにそんなことが書いてある。

次のページには魔法陣。

書いてある言葉はラテン語で

ET OCCURRENT DAEMONIA ONOCENT
URIS ET PILOSUS CLAMABIT ALTER
AD ALTERUM IBI CUBAVIT LAMIA
ET INVENIT SIBI REQUIEM

（荒野の獣はジャッカルに出会い 山羊の魔神はその友を呼び 夜の魔女は、そこに休息を求め 休む所を見つける。）

俺は魔法陣から目が離せなかった。

この言葉は旧約聖書のイザヤ書34章14節の引用だろう。

夜の魔女はリリスだろう。

山羊の魔神はバフォメットと解釈できるらしいから・・・結局どちらにしろ悪魔だ。

「本当に悪魔を降ろす為の本だったりしてな・・・。」

まあ残念ながら、俺には魔術なんて使えないし・・・

(・・・で・・・)

「は？」

今誰か何か言ったか？

(・・・を・・・んで・・・)

「なんて言ってるか全くわかんないぞ？」

本当に聞き取りにくいんだよ。

私を呼んでと聞こえる気がするが、無理だろ・・・。

「大体名前を知らないし。」

つか誰だよ。

(私に・・・名前はない・・・。)

「どう呼べっつーんだよ！」

あれか、まずは

「お前は誰だよ！」

(私は悪魔。)

「悪魔・・・？本当にこの本って・・・。」

(私を・・・呼んで)

「悪魔・・・リリス・・・バフォメット・・・メフィストフェレス・

・・・そうだ、フェレ・・・とか？」

(フェレ・・・それが私の名前・・・？)

「そういうことにしとけ。あまりいい名前じゃないかもしれないけど・・・。」

(私の名前は・・・フェレ。私は悪魔。私の糧は生命。私は僕。我が契約主をあなたとする。)

「・・・ちよつと待て、何だって？」

糧は生命？

契約主？

混乱している間にも俺の目の前に一人の少女が現れる。

「お前・・・お前がフェレか？」

「はい、マスター。」

「どういうことだ？」

「それは・・・」

「それにしても悪魔の書か・・・。」

「そういえば悪魔って結局何なんですか？」

俺の素朴な疑問に弥生が答えてくれる。

「悪魔^{あくま}とは、宗教用語。仏教では「煩惱」や「悪」、「邪心」などを象徴する超自然的な存在のことね。

キリスト教では神に対して謀反を起こした墮天使^{おてんし}ってことになっている。以上W〇kiより抜粋。」

W i 〇 i かよ。

「有名なだと、サタン、ルシファー、あとゲオルク・ファウストの呼び出したと言われているメフィストフェレスとか。

リリースとかリリムもそうね。」

「で？結局危ないのか、それは？」

「知らない。でも代償は払わされる。願いを叶える対価としてね。」

「ふーん・・・。」

なんか厄介な相手だってことは分かった。

「つか、魍^{わう}とか秋市とかつれてくれば良かったな。」

「そんな時間なかっただろ？つか、同窓会じゃねえっつの。」

ボケる鉄嘩と律儀に突っ込む直夜。

「仲いいですね。」

「高校のときのクラスメイトだ。」

「そうそう。俺と、直夜、吹雪、魍、鏡水、雅史・・・ってさっき言った秋市な、あとは爽と・・・。」

「そこまでいったらプチ同窓会でしょ。」
俺も突っ込んでおく。

つか、大体聞いたことのある名前だよな……。
とか考えていると、ピピピ……と、通話モードで回線がオープンされる。

「香苗か？」

「うん。」

「自動オープン回線は止めろつての。何回言えば……」

「別にほら、今は前みたいになっちゃうことは絶対ないわけじゃん？だからいいかなつて、緊急だし。」

「あのことは忘れる。んで、緊急つて？」

「吹雪さんの現在位置の周りに無数の反応あり。この動きからして交戦中と推測。」

「ハッキングしたのか？」

「……まあ。」

しかし、交戦中だと？

「鉄嘩さん、どうします？」

「そりやお前……乱入だろ。」

腰にぶら下げた刀に手を添えている。

「好戦的すぎだろ、鉄嘩は。」

そう言いながらも直夜は術符を取り出している。

その隣で亜弥と弥生が呆れ返っていた。

まあいいや。

俺も上着の内側へと手を入れる。

それに反応して何処からともなく二つ、銃が現れる。

M92FとM93R、俺の愛銃だ。

他にもあるが、普段はこいつ等だけだ。

「いつも思うけど、それどうやって出してるの？」

「そんなこと俺の親父に聞いてくれ。」

俺にだってわからん。

VRBが現実世界に干渉して魔力素子に影響を与えてとかなんかそんな感じらしい。

俺はそこまで頭がいいわけじゃないから分かん。

「囲まれてるなあ・・・。」

「いつも通り、俺がターゲットの背後の防御に入ります。」

「能力・・・か。弥生、お前も行け。」

「・・・分かった。」

俺の使える能力は二つ。

一つは人の認識できない速度で移動することだ。

俺自身も移動先を認識するだけでその移動中は認識することは無理だ。

一方、弥生は・・・よく分かん。

まあいいや。

加速。

ターゲットの後ろに入りそちら側の敵に銃弾を撃ち込む。

「・・・誰だ？」

「私のこと覚えてない？」

いつの間にか俺の隣に弥生が立っていた。

「弥生ちゃん？ってことは鉄壁のところが来たってことか？」

「そうです。」

吹雪さんとやらは一冊の分厚い本を片手で開けていて、それ以外には誰も居ない。

だが・・・

「フェレ、援軍だ。俺の記憶を見る。こいつ等には絶対攻撃を当てるなよ？」

「一人認識外の人、マスターの後ろ。」

「こいつはいい。誰が来てる？」

「弥生、鉄壁、直夜、亜弥、それと少女が一人。」

「その少女は多分俺の妹です。」

「・・・似てない。」

「余計なお世話だ！」

つか、何処から喋ってきてんだよ！
姿見せろよ。

「取り敢えず、全員倒すぞ。」

「分かってます。」

何処からともなく降ってきたナイフに刺さって倒れていく人も居る。
これは弥生がやっているようだ。

刀に切られていく人が居るが、刀に全く当たっていない。

これは鉄嘩の仕業のようだ。

魔術によって、焼かれ、流され、埋められ、刺され、絡めとられて
行く人がいる。

これは直夜と亜弥だ。

全ての攻撃を消され、毎回違う方法で倒されていく。

これは明日香の仕業だろう。

いまこの場所で戦っている人間は既に一般の域に居ない。

吹雪は悪魔を使役している。

弥生は空間を切って繋げている。

鉄嘩はラグを切っている。

直夜と亜弥は高レベルの魔術を使っている。

明日香はどういう能力なのかすら理解されない。

俺の速さには誰もついてこれられない。

この中を逃げられそうなのは、前に一度だけ会った、二つ名を無限
幸福位^{luck}だろう。

「終わりつと。」

吹雪が本をパタンと閉じる。

「ご苦勞様。」

「言うほどじゃなかったな。恵んとは何を考えてるんだか。」

「さあな。つか、鉄嘩たちは何をしに来た？」

「クライアントの要望だ。こっちの陣営に入ってくれ。」

率直に鉄嘩が言う。

「気乗りしない。昨日までランクⅠだったんだぞ、俺は。」

「なら護衛とでも思え。お前が悪魔そんなものの書を手に入れたのが悪い。」
酷い言い方だなあ。

もう少し言い方ってのをだなあ。

「分かった。俺とフェレとだ。」

「そこで納得するの？つか、フェレって誰です？」

俺の疑問は当然じゃないか？

だって此処に該当しそうな人は居ないし・・・

「え？君の後ろに居るよ？」

「は？」

振り向くと少女が立っていた。

・・・。

・・・。。。

「うわあ！？」

あまりに驚きすぎて反応が遅れた。

「大概失礼な人です。」

いや、後ろに羽ついてるし、ああ、悪魔か。

「この子が吹雪の契約した悪魔？」

「フェレです。マスターがつけてくれた名前なのでそっちにしてください。私は気に入ってます。」

「了解だ。」

取り敢えず、店に戻ろうよ。

ね？

だって、何時敵がくるか分からないから。

そう心で思っていると、

「その少年はさっさと帰りたいそうです。」

と、フェレが懇切丁寧に解説してくれやりました。

その言い方誤解しか生まない上に何気に心読むな、あと俺の名前は飛鳥。

妹は明日香。

と心の中で叫んでおく。

「分かりました、飛鳥。それと明日香。」

さすが・・・悪魔。

早速心を読んでくれやがりました。

くそ・・・疲れる。

悪魔（後書き）

疲れました。

そのうちもう一個のほうでかきましようかねえ・・・。
文章が拙いのは大目に見てください

護衛

「・・・ところで、本当に彼は仕事する気があるのでしょうか？」

「・・・どうだろう？」

万年空席を見つめる俺。

ネームプレートには咲良鏡水サクラ カガミとある。

「本気で最近は夜中の仕事しか来ないし、昼間の仕事を依頼しても姿を見せないんだよね。」

「さようで。」

一体昼間は何処で何をしているのだろうか？

「・・・って言うか、この世界って何なんですか？」

やけに人外が多い。

人間で言う人外は魔術師とか超能力者とか・・・取り敢えず一般人より多いのは確実だ。

人間じゃない文字通り人外というと・・・俺が会ったのは、吸血鬼、悪魔、神様とか？

「だって此処は戦争中だから。元から色々いたんだけど増えちまっ
てな。」

類は友を呼ぶてきな感じなのだろう。

「・・・そうそう、護衛任務がきてるぞ。」

「護衛・・・ですか？」

「魔術医師の知り合いがさ、ちと危険なところに行くらしい。だからだ。」

「自己防衛手段はないんですか？」

「あいつはあれと契約するのに力の全部を使ったと言っていた。
けどあいつの力はそんなモンじゃない。つまり、今の以外と契約
したくないってことだろな。」

「何の話ですか？つか契約って悪魔ですか？」

「ちげえよ。あいつは・・・って会えば分かるか。まあ行って来い。」

「分かりましたよ。」

「最近は何事なのが多いからなあ、気をつけるよ？
お前と同じ加速能力者とか片翼の吸血鬼とか。わけの分からないのも沢山居るからな。」

「了解です。」

吸血鬼はとにかく加速能力者なら何とかなるだろう。

「そういえば誰か借りてつていいですか？」

「弥生連れてけ。ついでに明日香と・・・香苗だな。吹雪はダメで、直夜は用事だしそんな感じで。」

「OKです。言ってくるよ。」

そうして4人で出かけることになった。

「で、護衛対象って誰なの？」

「狭衣サコロモ尋ヒコト杜トという人らしい。」

「ああ・・・あの人か。」

弥生は心当たりが会ったらしい。

「どんな人？」

「魔術医師・・・とは少し違うね。彼は契約してるのね。」

「悪魔じゃないって言ってたけど？」

「うん。神様と。」

神と契約？

「そんなことできるのか？」

「うん。物凄く力を持っている人だね。あとは血筋とか・・・そんな感じね。」

「ふん。」

とにかく凄いらしい。

「でも彼はもつと色々な神々と契約できるらしいね。でもしなかったか。」

「?・・・何だよ。」

「本人から聞いてね。」

つまり知らないのか?

「知ってるよ。でも・・・ちょっとプライバシーがね。」

「わかった。」

暫く歩いてから弥生が思い出したように言う。

「私の能力使えば歩かなくていいじゃん。」

全くそのとおりだ。

彼女は虚数少女と呼ばれている。
クワイエットドールズ

その能力は空間を切断することと接続すること。

これは多世界的にできるらしい。

だから彼女は色々な世界にいけるらしい。

「じゃあいくよ?」

弥生は人差し指と中指を揃えて縦に切る。

そして・・・黒い裂け目ができる。

次元の裂け目ってやつか。

「入って、ちよつと歩いたら出られるから。」

「安全なのか?」

「何時も私はやってる。」

中は真つ暗だった。

すぐに出られたけど。

「って家の中じゃん!!」

「うん。おい、尋杜!」

「やっと来ましたか。すぐ大丈夫です?」

「うん。」

弥生は親しげに話している。

「この人が?」

「誰ですか?この人は。」

正しい反応だろう。

「俺は飛島飛鳥。鉄嘩さんのところで働いている。」

「了解。自分は狭衣です。よろしく。怪我をしたらボクのところまで。」

「わかった。んで？今日は何処まで？」

「今日もまた出たらしいんで、彼。」

「誰だ？」

「加速男。何でも狙われるのは捌坂ヤサカの末っ子の不良グループの連中とその場に居合わせたやつらしい。」

捌坂・・・数符コードの連中か。

一之瀬、二ノ城、三野宮、四月一日、五藤、六道寺、七七五分ミツキ、捌坂、西玖条、十寸見マスキ。

数字のつく10家+その分家の一番本家に近い10家のことを数符と呼ぶ。

これらはこの国、いやこの世界で多大な権力を持っている。

特に一之瀬、二ノ城、三野宮、六道寺は世界を四分割しているといつてもいいくらいだ。

「捌坂の末っ子ね。確かにいい噂は聞かないね。」

俺も聞いたことがある。

力にものを言わせて、欲しいものを奪い取る。

金だろうが、女だろうが。

「それって恨みとかじゃないのか？」

「そうだろうね。あいつらのせいで死んだやつらなんて沢山いるね、きつと。」

「それだけなら問題はない。この世界は弱いやつから死んでくのだから仕方ない。

「ただ・・・ただどあいつは・・・あいつを見た人間まで殺しちゃうんだよ。」

「・・・そうか。」

その加速野郎がどんな恨みを持っているのかなんか分からない。

ただ・・・罪のない人間だけは殺したくない。

「ま・・・これも都合のいい考えだけど。」

「行きますよ。今日も奴にやられた一般人の手当てです。」
「了解。」

弥生が開けた裂け目へと入る。

「此処か・・・。」

酷い。

暗い路地裏全てが赤く染められている。

よく見てみると一般人と思しき人間は手加減されている。
それでも・・・

「嫌なやり方だな・・・。」

これはかなりの恨みを持っている。

「いくらなんでもやりすぎじゃないのか？」

「ボクもそう思います。でも・・・彼の心の闇はそれほどだってことでしょう。」

「・・・出て来いよ。」

我慢できない、俺には・・・

「俺に姿を見せろ!!」

居るはずのない男に向かって叫ぶ。
なのに・・・

「お前に分かるはずがない・・・。」

冷たい囁きが聞こえてきた。

「お前みたいな奴に俺の苦しみは分からない・・・!」

何だ・・・この殺気は・・・!

「誰だ!？」

体の震えが止まらない。

「見逃してやろうと思ったが・・・止めだ。」

そして・・・音もなく目の前に男が立っていた・・・。

護衛（後書き）

かなり文書がガタガタ。
その辺は多めに（r y

真実

「お前・・・が？」

「そうさ俺だ。」

目の前に立っていたのは男子高校生。

それが・・・この光景を作り上げたというのか？

「何なんだよお前は・・・！一体何の恨みだってんだよ！」

「んあ？教えてやってもいいけどよあ・・・自分で体験したほうが早いと思っぜ？」

体験？

どういうことだ？

「・・・止めだ。面倒くさい。俺はこいつらに恨みがある。」

そう言つて転がっている人の頭部を足で蹴飛ばす。

「だから殺す。碌でもない連中だ、どうなるうとお前には関係ないだろ？」

それとも何だ？お前はこいつらの知り合いか？」

「んなわけない。だが、やりすぎだろうお前は。一般人巻き込んだりさ！」

「確かにな。俺は少し熱くなりやすい性格だったようだな・・・興奮してつい・・・ね。」

そこは反省しているさ。だから俺はその男の治療行為を妨害したことはない」

何なんだ・・・こいつは？

まるで何も感じていないような・・・罪悪感がないのか？

「なあ、でもさ、何が違う？」

「はあ？」

「俺とお前の何が違う？戦争で人を殺すのと、恨みで人を殺す。俺とお前の何が違う？」

確かにそうかもしれない・・・

だが俺は・・・

「俺はお前のように罪悪感をなくしたりはしない！」
向こうから殺しにくる。

その過程で俺は何人も殺している。
それが戦争だ。

自分の目的のためとはいえ、自分から飛び込んだんだ。
だから、殺した相手に敬意くらいは表するのが礼儀だろう。
だけどこいつにはない。

ただの恨みなのだ。

「お前の中の闇がどの程度のものなのかは分からない。でも、もう止めるよ！」

いい加減、落ち着いただろう！」

もうグループの人間は粗方殺されてしまった。

だったら・・・

「・・・まだだ・・・！まだあの男を殺していない！」

「お前の目的は何だ！！」

「お前だって言うてるだろう？恨みだ！敵討ちだ！俺の・・・を殺したあいつを・・・！」

「そこまで殺し続けるってのか！？」

「当たり前だ・・・！俺は・・・ずっと苦しんできた。あいつを死なせてしまったことだな！」

「誰なんだよ・・・そいつは！お前をずっと縛っているそいつは！」
「そいつ呼ばわりするな！あの子は・・・俺の・・・俺の妹だ！！」
妹・・・？

身内を殺された？

「何があつた・・・？」

「そこまで語る義理はないだろ？」

「まあそうか。でも、まずは名前くらい聞いておかないとな。」

「俺か？俺は高崎結樹だ。」
タカサキ ユウキ

「ああそうかい。俺は飛鳥飛鳥だ。ついでにその妹は？」

「妹の名前は高崎・・・高崎・・・」
「・・・どうした？」

何故そのさを言わない？

「何故・・・だ？何故思い出せない！？」

「・・・どうしたことだ？」

「肉親にしては強く思いすぎだ。何故そこまで復讐にこだわる？」

「それは俺たちが・・・俺たちが・・・？っ！！？」

頭を押さえてひざをつく高崎。

「どうした？」

「くそ・・・このポンコツな体め・・・！代償として持つていかれたか！？」

代償？

能力の代償ってことか？

「そんなことまでしてどうして！」

「うるさい！！貴様にも味合わせてやろうか？」

「どういう意味だ！！」

「貴様じゃ俺にはついてこれない。何故なら俺の能力はただの加速じゃないからだ。」

思考の加速に対して、身体をオーバークロックさせる能力。間を認識できないお前じゃ俺に追いつけない！」

まさか・・・！

「逃げる明日香！！」

「え・・・？」

呆然とする明日香。

だが既に高崎は目の前から消えている。

「クソっ！！」

俺も能力を発動させ、明日香を守るように前に立つ。

だが・・・

「だから言っただろう？俺には追いつけないって。」

耳元でそう聞こえたかと思った瞬間、後ろにナイフが見えた・・・。

守れない・・・？

俺は・・・明日香を・・・

「大丈夫お兄ちゃん。私の能力を信じて・・・。」

「え・・・？」

ナイフの刃が・・・砕けた。

「何をした・・・？」

高崎も理解できていない。

俺も明日香の能力をちゃんとは知らない。

「私の能力は解析不能。^{Error Code} 誰にも理解されず何からも干渉されない。

無敵にして孤独な能力。ごめんね、お兄ちゃん、今まで黙ってて。

私の能力は私には何の攻撃も無効化される。

能力だろうと物理攻撃だろうと魔法だろうと。私の攻撃は一つではなく毎回変わる。

能力解析系能力ではランクⅠとされ、その上死神ですら私に手出しできない。つまり死ぬことがない。

昔から誰にでも化け物と呼ばれ続けたお兄ちゃんの隣に立ちたくて誰にも理解されない能力を願いつけた結果がこれなの。」

「明日香・・・。」

死ぬことがない。

確かに無敵だが・・・孤独な能力だ。

「ち・・・クソっ！」

高崎は加速して消えたが、俺にはもうどうでも良かった。

明日香にとってその能力は、重石でしかないことに気付いてしまったから・・・。

真実（後書き）

さて、やっと敵さんの登場です。

あとは順番に能力を公開していきただったので妹・明日香の能力です。

本当に大好きなお兄ちゃんのことを知ろうとしすぎて手に入れてしまった悲しい能力。

つて、まだ能力を明かしたのって3人目くらいです？

弥生と狭衣、明日香、飛鳥ですからねえ。

どんどん人増えてってますがまだまだ増えます。

また・・・SSもかけたらいいなとか既に思ってます。

特に高崎兄妹のこととか。

ではまた！

能力

「高崎は・・・後天性の能力者なのか？」

「どうしてそう思う？」

「VRBなどで後付された能力者は発動を隠せない。電気信号の流れで一瞬だけ体表面を光が走る。それがあいつにはなかった。」

それは誰もが等しく持つ条件なのだ。

人工的に作られた能力者の限界。

後天性とはいえ、発動を悟られることはない。

先天性との違いは、対価、だそうだ。

「そういえば、あなたの妹、弥生も能力者ですよ？天然の。」

「・・・そうだ。あいつは先天性の純粋な能力者だ。」

それは予想がついていた。

あそこまで強力な能力を操るなら、対価は下手をすれば自分の命だけだ・・・

「何か弊害はあるんでしょう？」

「・・・そりやな。」

先天性でもあまりに強力すぎる能力は生まれながらにして不具合が生じる。

それが普通なのだ。

「・・・弥生はな、二つある。」

「二つ？」

「一つではない・・・？」

あの能力はつまりそこまで強力だということだ。

「一つは、あいつはあれ以上身長が伸びることはない。ずっとあのままだ。」

「いま身長幾つなんですか？」

「145cm。中学生では小さいほうだろ？」

「その辺はわかりません。それでもう一つは？」

身長あのままっていうのは大変そうだな。

いろいろと届かなそうだな。

「もう一つは性格・・・というか人格だな。」

「多重人格とかですか？」

「そう。あれには絶対刃物を持たせるなよ？」

刃物・・・？

それかなり危ないと思う。

「もう一つの人格は快楽主義の狂人だ。あれとはたたかいたくない
といった人間がたくさんいる。」

できれば俺もあいつとは手合せしたくない。」

そう・・・ですか。

魔術師も人工の能力者と同じで、対価を払っている。

だが、それはある意味生きるために仕方ないことだと思う。

「最後に一つ聞いていいですか？」

「なんだ？」

「鉄嘩さんは何を望み、魔術師になったんですか？」

「・・・。」

そう、魔術師になるには望みがある。

世界さえ敵に回せるほどの覚悟を持った望み。

それが一般人と魔術師を分ける違いなのだ。

「俺は・・・。」

そこで少し考えてから、小声でつぶやく。

「俺は弥生を守りたかったただだ・・・。」

それが・・・あの強さに・・・

それだけその思いは強いのか・・・

能力（後書き）

今回短めで。

少し能力者について書きたかっただけです。

次回から本編に戻ります。

まだまだ人が増えますよ？

収集つかないくらい（笑）

弥生

私の目的はただ一つ。

あの高崎という男は可哀そうだ。

妹が殺されその記憶すら奪われた。

高崎とその妹の間にどんな関係があったのかは知らない。

だけど私にはその妹さんがこんなことを望んでいるとは思えない。

勿論高崎本人も・・・

私にできることはないだろうか・・・

私の力で・・・。

「見つかった？」

「ああ・・・また殺しちゃったみたいだよ？」

「・・・ふむ・・・で、どうしたい？」

「何がですか？」

「飛鳥は高崎をどうしたい？」

その質問の意図が理解できない。

「やめさせたいって言うなら無理だろうと返しておこう。」

「・・・なぜだ？」

「あの男の眼には狂気染みたものがあつた。飛鳥にはわからないか？あいつの眼は大切なものを奪われた眼だった。」

「大切なもの？」

「家族としてだったのか、それともそれ以上だったのかはわからないがな。」

「だけど高崎は記憶をなくして・・・」

「前世紀の漫画にもあつただろう？頭の記憶と体が覚えているもの。俺は知ってる。頭からは消えても覚えてるように行動する人間をな。」

「なら・・・なんとかならないんですか？」

「ならないな・・・時間は戻らない。それは絶対であらなければならぬ。」

そこで鉄嘩がはっ・・・としたように周囲を確認する。

「あいつはいないよな!？」

「あいつ・・・?」

「弥生だ!」

「いませんよ?」

「・・・よかった・・・。」

「なんなんですか?」

俺には本気で理解できない。

それでいいんだと、鉄嘩はいう。

「あいつなら・・・下手したら・・・。。。」

そうか・・・過去を変えればいいのか。

何で思い出せなかったのだろう?

・・・だけど、それはお兄ちゃんとの約束に違反する。

それに・・・あいつを私はコントロールできない。

話し合ってあいつは理解してくれるだろうか?

私は鏡の前に立つ。

そのまま横に向かって能力を発動する。

裂けた空間からナイフの柄が出ている。

ここからは交渉の時間だ。

ナイフを抜いた瞬間に私は自分の体をコントロールできなくなる。

鏡越しの交渉だ。

いつも気まぐれに私に体を返すあいつもいつそのまま留まるかわからない。

それでも・・・可能性があるなら・・・

私はナイフを裂け目から引き抜いた。

いま俺は・・・いや俺たちは走っている。

高碕がまたやったらしい。

いや・・・正しくは最中らしい。

罨を張っていたのだ。

「とまれ。」

「・・・どうした？俺を殺しに来たのだろうか？」

「違う。」

「違うないな。なぜなら、俺は捕まったとしても更正などしない。

また、同じことをするからだ。殺す以外に止めることはできない！」

「・・・くそっ・・・！」

しかし俺を弥生が押しとどめる。

「私がやる・・・。」

「・・・なぜ。」

「まだあんたにはそんなに人を殺させたくないのね。」

そう笑いながら言った。

「ほお・・・そんな御嬢さんが俺の相手か？いいぜ？」

その瞬間、高碕は加速した。

銀色の光が一閃、弥生の首元を抜ける。

「弥生！」

「残念。私は切れない。」

「あいつの能力は応用範囲が広い。たぶんあいつはここにいて、こ

こにいない。」

「はい？どういう・・・。」

位相だといった。

弥生は自分のことを別の位相に送っているらしい。

同じ世界の別位相。

見えるが触れられない場所・・・

「だけどそれでは弥生からも干渉できないのでは？」

「いや・・・」

「こつちからいい？」

弥生は自分の横の空間を切る。

ナイフがそこから一本だけ落ちる。

そして足元の切られた空間に吸い込まれた。

次の瞬間、そのナイフは高崎の足の指あたりに刺さっていた。

血が出ていないところを見ると、足の指の間に刺さっているのだろう。

「・・・何をした？」

「私の能力は空間、次元の切断と接続。私は全ての場所を繋げる上に、私には触れられない、相手には。」

「で・・・？殺すのか？」

「殺すんじゃないね。私は・・・」

そういつてまた空間を切る。

そこからナイフの柄が姿を見せる。

それを前にして彼女は深呼吸する。

「待て・・・あいつを呼ぶきか!？」

「あいつ？」

「前に言わなかったか？如月、あいつだ！」

如月。

弥生が対価として授けられたというもう一人の彼女。

「正確に言くと彼《・》なんだけどな。だが・・・何を・・・？」

「そっいえば如月とは？」

「あいつは自分をそういう。どちらかというと・・・弥生という人格のほうがあとからできたようなものだ。

この能力は如月に宿ったものなんだといっていた。弥生はその対価として生まれた。」

「でも如月は男でしょう？弥生は女の子じゃないですか？」

「女の子だから性格が女の子っぽくないといけないわけじゃないだろ？」

「そう・・・ですね。」

「だが能力は如月本人に宿ったものだ。他人の人格が使えるものじゃない」

弥生はナイフを引き抜く。

その瞬間眼の色が変わった。

「久々だなあ・・・弥生は本当にこの体を大事にしてくれるねえ・・・俺以上に。」

弥生・・・基、如月はナイフを弄ぶ。

「だが実際には弥生も能力を使っている。それがたぶん対価なのだろう。」

「どういう意味ですか？」

「他人が使うということは能力の質が下がるということだ。つまり弱くなる。だが、その対価はある期限までのものだ。

先天性は一定期間までで対価を支払わなくて済むようだ。弥生・・・いや、如月のこの対価はもう一つの対価、身長の上限に達した時だ。」

「それって、とつくに終わってるでしょう？」

俺がこの世界に来たときには弥生はこの身長だった。

「支払切った場合、弥生はどうなるんですか？」

「消える・・・はずだったと如月は言っていた。」

まるで遊ぶように如月は高崎とナイフを切り結んでいる。

「だけど消えなかった？」

「弥生は対価を支払って神と取引をした。」

「そんなことが・・・？」

「いや、対価が残ることだった・・・かな。」

残ること？

如月はさつきから本当に遊んでいるようにしか見えない。

空間を切って高崎の後ろに回ったりと弄んでいる。

「正確には如月の能力の質を上げる代わりに、永続的に弥生を残すこと。ただしこの人格を消すことは如月にはできる。」

その場合、あとから手に入れた部分の能力をロストするというものだったらしい。」

「なぜそんな面倒なことを如月は？ 如月にとって弥生は邪魔なんじや・・・？」

「如月は言っていた、『弥生はお前の妹っただけじゃねえ、俺の妹でもあるんだよ。そいつの願いを叶えるのは兄の役割じゃねえか？』だとさ。」

その上、『お前だってそうだろ？ あいつの願いなら・・・』とまで言われたよ。」

鉄嘩はくすくすと笑う。

「それに、『お前だって嫌だろう、あいつが消えるのは。だって弥生と兄ちゃんは・・・』って、言うべきじゃないなこれは。」

「言わないんですか!？」

「言ってもいいけどさ・・・知ってるだろ？ 俺はあいつにぞっこんだからな。」

そういえばこの人は真正正銘のシスコンだった・・・。

「さてと・・・そろそろ俺はすべて見せたぜ？」

「それがどうした・・・!」

「うん・・・そろそろだな。先に兄ちゃんに言うておかないとな。」

「なんだ？」

鉄嘩が如月に聞く。

「弥生からの伝言だ。約束、守れなくてごめん。」

「おい・・・何を頼まれた!」

「頼まれたんじゃないと言っておこうか。兄ちゃん、これは俺の独断だ、そうしておいてくれ。」

「おい!」

「静かにしてくれ、そろそろ現れるはずだ。」

何の話をしているのか全く分からない。

その時、目の前に人が現れた。
だがおかしい。

半透明・・・だと？

「何の冗談？真昼間から幽霊？」

「いや・・・存在の可能性・・・、まさか過去を変える気が！」

「そうだ。観測者たる俺なら回避できる、こんな世界・・・」

そこで如月は一息つく、そして続けた。

「弥生の望まない世界なんて、変えなければならない。」

瞬間、俺たちの周りにラインが引かれた。

円形に・・・。

「今回、俺だけではできそうにない、過去に行くのは面倒だからな。だから過去へ行くぞ、全員で。」

「なぜだ・・・俺が反対するならおいていけばいい。」

「ちよつと力を使いすぎてな、帰るためには俺が一度眠らないといけないからな・・・、その・・・飛鳥だっけか？」

「はい？俺？」

「そうそう、あんた。鉄嘩がキレたら殴ってでも止めるよ？」

「問題ないよ。そうなったら私がとめる。弥生ちゃんは私の妹みたいなものだから。」

俺の横から香苗が出てきていう。

「はは・・・そうか。いい姉貴ができたみたいだなあ・・・頼むぜ？」

円は回転を始め、球になる。

行くぞ・・・と、如月が言う。

一瞬の浮遊感・・・そして・・・

「ついた・・・よ。」

弥生に戻ったらしく、女の子の口調で言う。

「・・・確かにな。」

近くの家からカレンダーを覗き見ると、一年前の6月19日。
高碕の妹の・・・命日だった。

弥生（後書き）

いつもの長さに見てみたら次に続いてしまった。

早く書こうとはおもっけど・・・

ついでに高碛君がつねに高碛君としか呼ばれないのは名前を忘れるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3331t/>

VRB

2011年11月11日07時27分発行